

東京バッハ合唱団 月報

[第 601/602 号] 2012 年 7 月, 8 月合併号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替: 00190-3-47604
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter Nos.601/602

July / August 2012

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

東京バッハ合唱団 創立 50 周年に寄せて

共に音楽する喜び

高梨 公明 (団友、春秋社編集部)

バッハ一筋 50 年 — しかも日本語でうたう壮大な試み。ひとくちに 50 年、つまりは半世紀にわたる偉業は驚くべきことだ。この快挙を成し遂げた大村恵美子率いる東京バッハ合唱団の創立 50 周年記念懇親会が 7 月 8 日に開かれた。

当団員はもちろん、合唱団を支えてきた後援者が集い、和やかな雰囲気のもと会は滞りなく進められた。功労者を讃える表彰も行われたが、なによりここに集うおひとりおひとりの晴れ晴れとした表情が眩しかった。

バッハのいったい何がそんなに人をひきつけるのか。

どなたかがご挨拶の中で、「バッハの自由」ということに触れられ、にわかに腑に落ちた。そうだ、この自由の精神こそ、大村先生の音楽に臨む姿勢の骨子にあり、その精神に寄り添う形での 50 年であったのではないかと。それは、これまでのひとつひとつの演奏会で団員のみなさんにも浸透し、共に音楽する醍醐味になっていたにちがいない、1962 年 11 月 10 日の日付をもつ第 1 回公演以降の記録を眺めながら、そんなことを考えた。

一般の《ロ短調ミサ曲》の演奏会が思い起こされる。宗教音楽の最高峰ともいえるべきこの曲を日本語歌詞に託して見事に彫琢された演奏は圧巻であった。母国語による語りかけによって、音楽が直截に伝わってくる。この演奏にこそ当合唱団の充実した 50 年の歩みが集約されていると感銘を深くしたものだ。

人は言う。たゆまぬ練習の成果であるとか、情熱の賜物であるとか。いわば情緒的な賛辞が好んで使われるけれども、私が考えているのは、そのようなレベルではなく、もっと音楽の根源に根ざしたものであったことだ。具体的に言えば、たとえば、それはテンポの取り方にも現れていた。音楽表現の最も基本にして本質的なテンポ感。これは、ステージ上の団員にのみならず、聴衆が感じ取った重要なファクターであったにちがいない。バッハ音楽の礎とも言うべき「音楽の推進力」ということ、それが巧まずして表現されてい

たのである。

さて、祝賀会で特筆すべきは、ゲスト講師、笠原芳光先生による講演である。論題は「逆説とはなにか — 宗教より宗教的なもの」。その力強く、論旨明快なお話は 1 時間、皆を釘付けにした。内容からして、太宰治の文学的営みにおける宗教性ということで、直接バッハや宗教音楽に関わるものではない。しかし、実は根本においてバッハへのアプローチを鼓舞するものを感じ取った。

そのレクチュアの内容から私なりに結論的なものを集約すると……。

イエスにせよ、ゴータマ・ブッダにせよ、当人たちはキリスト教や仏教といった特殊な宗教を創始したなどの意識などもってはおらず、ただ、ひたすら人間の生きるべき真の道を志向し、説いていただけである。したがって、まさしく人間存在の地平でこそ彼らの思想をくみとらなければならない……。

翻って、私たちがバッハの音楽に立ち向かうとき、どういうことになるのだろうか。

バッハはライブツィヒの神学者や哲学者、あるいは聖職者と大いに論争していたに違いない。制度としての宗教を超えて、バッハがキリスト教のいったい何をよりどころとしていたのか、その答えはまさに音楽そのものにある。バッハの深い信仰心と聖書への思いがそこに表明されている。それゆえ、音楽家は、そして聴衆はそこに目を投じなければならない。笠原先生の講演を拝聴して、いろいろと想像を巡らせることとなった。

この集いは、和気藹々のなか中締めとなり、二次会へとなだれ込んだ。そこでたくさんの団員の方たちとバッハ談義、音楽談義と相成った。

バッハを語る時、だれしもが熱を帯びる。うれしいひとときであった。

<編集部より>

・笠原芳光氏の記念講演「逆説とはなにか—宗教より宗教的なもの」の筆録全文を掲載しました (p.2-4)。

・創立 50 周年記念特集の当月報は、8 ページ組みの 7・8 月合併号とさせていただきます。

逆説とはなにか

—宗教より宗教的なもの

笠原 芳光 (団友、批評・宗教思想史)

1. 宗教と宗教的の相違

ただいまご紹介いただいた笠原芳光でございます。今日の話は「逆説とはなにか—宗教より宗教的なもの」という題をつけたのですけれども、まず「宗教」と「宗教的」のちがいは何か。「宗教」というのは名詞ですね。それは3つの内容をもって、教義、儀礼、教団、この3つです。「宗教的」というと形容詞ですね。それは、宗教の内実の問題をいいます。宗教の教義、儀礼、教団などにこだわることなく—ここがたいせつなのですが—、もっと根源的、精神的、そしてパラドックスとしての宗教性をもっているものです。

2. 太宰治『櫻桃』

そこで太宰治の『櫻桃』という晩年の小説についてお話しいたします。太宰治の文学は、ロマンティズムで、おもしろい、たのしい、スピーディーな文学で、西洋でいうとチェホフに似ています。私はチェホフも好きで、その作品では宗教的な内容を隠して表現しています。チェホフは小説を書くようになってからは、教会にはいっさい行っていません。しかし宗教的なものを秘めているのですけれども、それを表面に現わしていません。

太宰治のほうは、小説を書きはじめた初めから晩年にいたるまで、宗教的な作家です。世のなかでは、そんなふうに言われていませんが、私はそう言いたいと思っています。

『櫻桃』は、雑誌『世界』の1948年5月号に発表された短い作品ですが、その始めに、「旧約聖書」詩篇121の冒頭、「われ、山にむかひて、目を挙ぐ」、ここだけが引用されています。この始めだけを引用している。ここが重要なのです。これは文学を表わしています。私は戦後、神戸に住んでいて、昭和2年生まれで85歳になりますが、よく六甲山の山の裾を歩いていると、この「山にむかひて目をあぐ」を思い出します。詩篇のこの句の次は「わが扶助(たすけ)は いくよききたるや」とありますが、これは哲学です。さらにつづいて「わがたすけは 天地(あめつち)をつくりたまへるエホバよりきたる」と受けつがれる。ここまできると、キリスト教の人たちは安心するかもしれないが、これはいわば神学です。キリスト教神学は世界最高の学問と思われているかもしれませんが、じつは最低の学問だと、私は思います。イエスをキリストとしたと



●講演中の笠原芳光氏 (アルカディア市ヶ谷)、写真: 岡村隆

ころから神学は始まっていますが、イエス自身はキリストとは言っていないのです。

さて、太宰治の文学性について、お話ししたいと思います。宗教文学というのは、解答ですね。宗教文学というのはたくさんあります。遠藤周作などは、だいぶましなほうです。ところで宗教文学は解答であるが、宗教「的」文学というのは、そのものが直接、解答となるのではなく、ある方向を指し示す、示唆なのです。

太宰は、最初の作品である『晩年』(1936年)で第一回の芥川賞を獲得することができなかった。そして地団駄ふんでくやしがつたということです。昔の芥川賞受賞作品には、いまとちがって、かなり優れたものがありました。しかし、どういうわけか、三島由紀夫と太宰治とは、優れた文学者であるのに、芥川賞をもらわなかった。そのあとも生涯もらっていないのです。

3. 太宰文学における「宗教的なもの」

そこで、太宰文学における宗教的なものとは何か。日本の作家のなかで太宰ほど聖書を徹底的に読んだ人はいないでしょう。でも教会には行っていません。洗礼は受けていないのです。

「聖書一卷によりて、日本の文学史は、かつてなき程の鮮明さをもて、はっきりと二分されてある。マタイ伝二十八章、読み終へるのに、三年かかった。マルコ、ルカ、ヨハネ、ああ、ヨハネ伝の翼を得るは、いつの日か。」

(「HUMAN LOST」1937年4月)

これだけ詳しく聖書を読んだ人は、ほかにはいないのではないかと思います。これを書いたのは1937年、28歳ですから、若いころから熱心に読んでいるのです。

「教会には行きませんが、聖書は読みます。世界中で、日本人ほどキリスト教を正しく理解できる人種は少ないのではないかと思います。キリスト教に於いても、日本は、これから世界の中心になるのではないかと思います。最近の欧米人のキリスト教は實に、いい加減のものです。」

(「一問一答」1942年4月)

この文章など、戦争のことは言っていないませんが、若干、戦争中の思想の影響を受けているところもあるのでは

ないかと思えます。

とにかく、太宰は聖書を徹底的に読みました。塚本虎二（1885-1973、無教会派、聖書研究者）は、『聖書知識』という雑誌を出しつづけましたが、太宰は塚本を尊敬し、1941年から46年まで熟読しました。「私は塚本先生を陛下の教師にしたいと空想してゐます」と菊田義孝宛に昭和21年5月1日の書簡に書いています。（田中良彦『太宰治と「聖書知識」』朝文社、2004年）

ところが、聖書知識社から読者の職業や学歴を問合わせるアンケート用紙が届いて、太宰はそれを読んで激怒し、こういう返答を書き、それ以来やめてしまいました。

「十年來の読者なり。最低の読者なり。以後、購読の意志なし。」

出版社はむしろ、雑誌をこれまでこんなに熱心に読んでくれたことを大いに感謝すべきところだと思うのですが。

太宰はしばしば小説の中にも、塚本の文章を引用しています。始めのころの作品から終わりのころのものまで、たとえば『正義と微笑』（1942年6月）に、

「ああエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ、牝鶏のその雛を翼の下に集むるごとく、我なんぢの子どもを集めんと為しこと幾度ぞや」（マタイ 23:37）

と、イエスのような人も、泣いたという聖書のこのことばを受けて、

「空なことばかり考えてはいけない、泣くことが出来なければならない。」

（1935年10月号）

もう一つ例をあげると、『鷗（かもめ）』。

「靈魂の熱は下がったかね。魂の病気はどうかね。一私は信仰のことが秘密に思はれてならない。」

（1938年4月号）

太宰の若いころの友人、美術学生であった齋崎潤という人は、塚本虎二を尊敬していて、『聖書知識』を購読していたので、この友人から太宰は『聖書知識』の旧号を借りて熟読しました。しかし最後は前にお話ししたような状態になります。

4. 太宰文学の逆説性

さて、太宰文学の逆説性ということについて、ですが、作品の中から引用してすこし考えてみます。1947年3月に発表された『ヴィヨンの妻』のなかにあるくだりです：

「神があるなら、出て来て下さい！ 私はお正月の末にお店のお客にけがされました。」

「だが神は出てこない。いったい神はいるのか。神はいる、というのは宗教である。ここで太宰は神はいるとも、いないとも言っていない。ただ、いるなら、出

てきてくれと言っている。このような大問題をひとりの女の叫び、いや呟きによって表現するのが太宰文学である。」（笠原芳光「宗教的な文学とは」、『関西文学』2005年12月）

ヴィヨンというのは中世フランスの詩人で、それを研究している学者の奥さんが、生活に困って、飲み屋で給仕の役割などをする。正月に客にけがされた、ということになる。女は神に出て来てくれとだけ言っている。私は、神はあるとは思いますが、どういふものか言えない。お願いしても、おどしても、応答がない。あるとは思っても、どういふ存在かは言えない。イエスも神についてはいっさい説明していない。キリスト教は、神学で神についていろいろ説明しています。

太宰も、神がいるともいないとも言っていません。ヴィヨンの妻のように叫ぶだけ—このように表現するのが太宰文学であると思えます。

『櫻桃』の次が『人間失格』です。そのあと『グッドバイ』を13回、朝日新聞に連載するために書きました。『櫻桃』は死ぬ年の1948年5月に書かれた、短いがひじょうにすぐれた作品です。そして最晩年の遺作が『人間失格』で、そのなかで反対語を探すゲームのようなくだりがあります。

「…神にはサタンというアントがあるし、救いのアントは苦悩だろうし、愛には憎しみ、光には闇というアントがあり、善には悪、罪と祈り、罪と

コラム再録 「望楼」

東京バツハ合唱団といえば学生時代から翻訳と指揮を続けてきた大村恵美子氏の顔が浮かぶ。600号の月報に「友あり四方より集う、楽しからずや」の一文を記している。その「友」の一人、畏友の85歳の笠原芳光氏が7月8日、同合唱団の50周年記念懇親会で講演をした▼笠原氏は亡き赤岩栄牧師のキリスト教止揚の思想の深い後継者として知られる。その日は「逆説とは何か—宗教より宗教的なもの」と題して、太宰治の文学に沿って語った▼「宗教」は教義・儀礼・組織をもつ、「宗教的なもの」はより根源的な「逆説的としての宗教性」である。太宰は「櫻桃」で、詩篇121編の最初の一句「われ山にむかひて、目を挙ぐ」をのみ引用する。▼続く哲学的な「わが扶助はいつこよりきたるや」も、神学的な「わが扶助は…エホバよりきたる」についてもあえて語らない。太宰は文学に「宗教的なもの」を含意すると。この指摘には同氏の宗教思想家としての深い洞察がある。▼「私は、どんな宗教組織も、どんな政治組織も信用しないアナーキスト風人間で」（前出月報）と自らを語る大村氏の共鳴が伺える。バツハ演奏家の隠された一面を知らされた。（健）

キリスト新聞 第3236号（2012年8月4日号）
執筆者：岩井健作氏（明治学院教会牧師）

悔い、罪と告白、罪と、……嗚呼、みんなシノニムだ、罪の対語は何だ」

「ツミの対語は、ミツさ。蜜の如く甘しだ。腹がへったなあ。何か食うものを持って来いよ。」

これがパウロの言葉となると、罪の対語は信仰、「凡て信仰によらぬことは罪なり」(ロマ書 14 章)。聖書のこんなところは、太宰ももちろん知っていたはずですが。でもわからないと言っている。これが太宰文学の一つの本質をあらわしていると思います。このような大問題を、ひとりの女の叫び、いや呟きで表現しているのです。

パウロという人は、イエスの後継者とされていますが、おどろくべきことです。パウロの文章には、イエスの言葉は出てきません。また二人は直接、一度もあったこともありません。十字架で殺される時、最後にイエスは何と言ったか。マタイやマルコによると、ただ一声、大声で叫んで息絶えた、とあります。助けを求めたかどうかもわからない。その後、そういう形で造られたのがキリスト教という宗教で、パウロは地中海の沿岸を歩きまわって広めていったのです。イエスの弟子といえば漁師たちで、ものを書けるのは元税吏のマタイぐらいのものです。パウロのこの活躍が、いわゆるキリスト教の発展の原因のひとつでもあります。だが、イエスとパウロとは、知らない同士だし、大きな違いがあります。ブッダの弟子は優秀なひとも多く、本人も 80 歳まで長生きをしましたから、弟子たちももちろんブッダとよく知り合っていたし、そのもとで成長もした。イエスとブッダは本質的に似ていますが、キリスト教と仏教はかなり違ってきます。

パウロや弟子たちは、その後、迫害にあって殺されましたが、やがて認められるようになってきました。ヨーロッパは、砂漠風土のユダヤとちがいで、草木が多い風土で、このままではキリスト教は発展する見込みがなさそうでした。そのころヨーロッパに広まっていたドルイド教も、草木を重視する宗教で、女性神がいました。

イエスは、母マリアとは折り合いがよくなく、父ヨセフが大好きでした。その父がなぜか早い時期に亡くなって、それでイエスはヨハネの洗礼を受けるのです。宗教家で、父母が亡くなって入信の動機となったのは、

キリスト教ばかりでなく、仏教にも例が多いのです。イエスはヨハネ教団に入ったけれど、当のヨハネは政治的な権力者によって殺されます。イエスはそこを出て、ひとりでガリラヤ地方を歩きまわります。それを私はあえて“遊行”と言いたい。ブッダは国王の息子で 80 歳で亡くなり、イエスは大工の息子で 30 歳ほどで亡くなったけれど、二人はある意味で似たところが多い。

16 世紀になってからキリスト教では宗教改革がおこり、プロテスタントがカトリック教会から分かれて出ますが、これは中途半端な改革であって、原点のイエスに還る改革ではありません。改革者ルターやカルヴァンはすぐれた人物であったけれど、それでもイエスに比べれば大したものではない。仏教も、ブッダからだんだん変わってきていることは、キリスト教に似ています。イエスの場合、自分のことを救世主(キリスト)と言っているわけではない。出あった人間を救うだけ、生かすだけ。世界全部を救うなどと言っているではありません。イエスを離れたキリスト教はその後、腐敗堕落して今日にいたっています。

きょうはここで終わらせていただきます。ありがとうございました。

(2012 年 7 月 8 日、アルカディア市ヶ谷)

講師：笠原芳光氏

1927 年大阪生まれ。宗教思想史の視点から活発に著作や論評をされています。京都精華大学名誉教授、同元学長。『イエス逆説の生涯』(春秋社)、『日本人のイエス観』(教文館)など著書多数。



●懇親会スナップ (アルカディア市ヶ谷)、写真：松尾茂春

創立 50 周年メッセージ

(敬称略)

草間美也子 (オルガニスト)

50 周年、まことにおめでとうございます。小林道夫先生が指揮なさった、1 回目の演奏会を、ワクワクしながら聞かせていただいたのが昨日のこのように思い出されます。その後オルガンを弾かせていただくようになり、ほんとうに多くのことを学ばせていただきました。多くのバッハの作品を訳された大村先生の、後世に残る大仕事が、さらにさらにつづきますように、と切にお祈り申し上げます。

松井啓子 (ヴィオラ奏者)

創立 50 周年、おめでとうございます。東京バッハ合唱団とは、もう 30 年以上のご縁になります。駆け出しだった私も、齢を重ね、いつの間にか初めてお会いしたところの大村先生のお歳をはるかに越えてしまいました。

長年にわたり、すばらしいソリストの方々と共に演じられる喜びと、バッハの美しい音楽を演奏できる幸せを与えてくださいましたことを、心より感謝いたします。

佐々木まり子 (声楽家・アルト)

大村先生、バッハ合唱団の皆様、創立 50 周年おめでとうございます。今でこそ日本各地で歌われているバッハの声楽曲を、半世紀もの長い間、ただ一点を見つめて、邦語訳演奏をしているのは、皆様以外にはありません。私たち、地球上で日本に生を受けた者として、バッハの作品を母語で歌えるよろこびは、生涯、生地ドイツから出ることのなかったバッハがめざしていた普遍的な喜びそのものを味わっているのだと思います。

ドイツ留学から帰国直後より、ずっとバッハ合唱団のコンサートで様々な曲を歌わせていただき、鍛えていただきました。11 月の《クリスマス・オラトリオ》、来年 3 月の《マタイ受難曲》と、またその喜びをご一緒できますよう備えたいと思っております。

鳥海 寮 (声楽家・テノール)

東京バッハ合唱団に参加して団員の皆さんと一緒にバッハを歌うことによって、はじめて僕の心に届き、響いたあのバッハの、静かで深く尊い声。それはいつまでも僕の心に生きつづけています。また合唱団での団員方との交わり、僕の人生にとってじつに貴重なものだった交わりもまだ僕の心に宝ものとして生きています。

感謝の思いをもって回想し、合唱団のますますの充実、ご活躍を祈ります。今日のご盛會を願って乾杯！

青木道彦 (後援会員)

毎年のお祝い会にはなるべく参加させていただいたのですが、今年はちょうど 7 月の上旬数日、昔疎開して、終戦後までもすごした岐阜にとどまらねばならず、7 月 8 日の会には欠席になって、まことに残念です。11 月、来年 3 月のコンサートには、多くの知人を案内しようと、ただいま努力をかさねております。バッハ合唱団のますますのご発展をお祈り申し上げます。

▶創立 50 周年記念公演[2]◀

(第 107 回定期演奏会)

《クリスマス・オラトリオ》I-III 部 教会カンタータ第 71 番《主は わが君》

2012 年 11 月 9 日(金) 19:00 開演

会場:杉並公会堂(荻窪)

[チケット]発売中

前売り 3500 円(全席自由席)

▶創立 50 周年記念公演[3]◀

(第 108 回定期演奏会)

《マタイ受難曲》

2013 年 3 月 30 日(土) 14:00 開演

会場=紀尾井ホール(四谷)

<夏季集中練習 (全 4 回)>

- ① 8/11(土)… 第 1 部(第 1 曲～第 29 曲)
- ② 8/18(土)… 第 2 部(第 30 曲～第 68 曲)
- ③ 8/25(土)… 小合唱中心
- ④ 9/1(土)… 全体仕上げ

時間=毎回 13:00-18:00 (5 時間)

会場=荻窪教会(日本キリスト教団)

(新規参加歓迎)

<少年少女合唱団員 募集!>

《マタイ受難曲》の児童合唱にご参加いただけるお子さんをご紹介ください。

- ・小学生以上、合唱経験の有無を問いません。
- ・参加費 3000 円のみ。楽譜と練習用 CD 贈呈

—練習日程と会場—

練習開始=8/25(土)、14:15 集合(荻窪教会)

日程=9 月から毎月第 1・第 3 土曜日(月 2 回)、

来年 2 月まで(3 月は特別日程)

9/1(土)、9/15(土)、10/6(土)、10/13(土)…

時間=毎回 14:30～15:15 (45 分間)

会場=荻窪教会(日本キリスト教団)

◎詳細は事務局へお問い合わせください。

- ・8 月中の通常練習は、夏季休暇です。
- ・9 月の練習開始は 9/3(月)より:《クリスマス・オラトリオ》I-III 部、カンタータ第 71 番《主は わが君》
- ・9 月からの土曜の練習会場は、荻窪教会(日本キリスト教団)に変更になります。

釧路より宜しく 新入のご挨拶

上から読んでも下から読んでも クシロヨリヨロシク

須藤 富美（後援会員・ソプラノ団員）

5月19日の荻窪教会での《マタイ受難曲》演奏会に参加させていただき、大村先生はじめ、バッハ合唱団のみなさまに御礼申し上げます。

釧路は今ちょうど桜の季節です[5月28日消印のご寄稿]。もう明日には散り始めるのではないのでしょうか。沖縄石垣島で桜の花を見てから5か月、桜前線はゆつくりと日本列島を北上して、多くの人を楽しませてくれました。

演奏会の翌日、20日の東京は26度と暑いくらいの陽気となりました。帰りの飛行機は夕方の便だったので、午前中、新宿御苑へ行きました。紅・黄・ピンク・白と、さまざまな品種のバラがみごとでした。そして花もかくれてしまうほどの大勢のカメラマン。バラの花に顔をつけると、なんとも表現のできない美しい香りがするのです。

《マタイ受難曲》の終曲も、悲しいけれど美しい。大村先生がリハーサルのときに、「この曲を歌うときは、亡くなられた方のことを思って歌ってください」と言われたので、私は母を思って歌いました。母の顔を思い浮かべ、母が聞いてくれるように願って、この美しい合唱の響きが母に届くようにと歌いました。

終曲がおわり、お客様が大きな拍手をしてくださったとき、目には見えないけれど、母も一緒に拍手をしてくれたのではないかと感じたのです。

*

中学・高校のころ、バッハの《インベンション》や《シンフォニア》を弾いても、単調な感じがして、あまりまじめに練習しませんでした。社会人になって、ピアノも練習しなくなり、バッハの曲とはほとんど接することなく年月が過ぎてしまいました。私の人生にも、大波・小波・さざ波といろいろあって（人生の大先輩がバッハ合唱団に大勢いらっしゃるのに生意気のようなのですが）、私なりになんとか越えてきたわけです。そして、自分は、死ぬまでにあと何曲弾けるのかしら、何曲歌えるのかしら、と本気で考えたのです。

4月に帯広で、《ロ短調ミサ曲》の全曲演奏会に参加させていただきました。地方都市でこのような大曲を演奏するのは大変なことです。発足から実現まで10年かかったとのこと。ソリストの幸田浩子さんは、声も美しいけれど、本当にきれいな方でした。

やはり死ぬまでに《マタイ受難曲》の全曲演奏会に参加したい。そのためには、地方都市に暮らしては無理、飛行機でぶ〜んと飛んで、東京まで行かなくてはならないのです。《マタイ受難曲》を歌い終わったあととならば、飛行機が墜落してもなんの悔いもありま

せん。どうしてバッハの曲を日本語で歌うのか、あまりよく理解していなかったのですが、日本語の歌詞を楽譜に書き写していて、やっとその意味がはっきりとわかったのです。やはり私は、短足・胴長・鼻ぺちやの純粹の日本人であるということが。

自分の部屋でCDを聞いているときは、長く感じる第1曲の前奏も、大村先生の指揮される姿を見ているとなんと短く感じることでしょう。バッハのコラールを歌っていると、自分の心の中から醜いものが出ていて、清らかなものだけが残っているように感じます。

あまり多くの練習には参加できないので、CDを聞きながら勉強しています。先生、合唱団の皆様、これからもどうぞよろしくお祈りします。

創立50周年メッセージ

天高く、アインザッツする精神

本田 茂樹（バス団員）

バッハの音楽には、内部にひそむ眩い光、湧き出す光がある。魂を活性化させ鼓舞するエネルギーがある。言葉をかえれば、「遙けさ」「深遠さ」とでもいえるものがある。まさに聖歌439番の〈光に歩めよ〉“Walk in the light; so shalt thou know”[讚美歌326、「21」502]を言葉どおり現前させる音楽である。それは何とも表現することができないが、いわば人間存在の純粹な喜びを享受できる音楽である。

大村先生の主宰する東京バッハ合唱団では、バッハの音楽は‘日本語’という言の葉で、われわれは、意味を理解しつつ、意識のより高い次元にまで引きあげられ、昂(たか)められるのを感じる。大村先生の、目的に向かって自己を絶えず新しくする魂、人間的努力の素晴らしさの極限へと向かう精神——、一人の人間の精神に触れることもまた悦びである。練習の合間のお話しも面白い。先生はよく練習の合間に「団員には純粹な人が多い」といわれているが、われわれは、この合唱団を通じて自分をさらに純粹にして、自分の形をまた新たに刻みとめることができるのではないだろうか。そんな魅力のある合唱団である。

週2回、バッハの旋律にふれ、日常的な時間、空間をこえて人間的感覚の極限に迫ることができるような気分になるのを感じる。心地よいひと時である。バッハの曲に直に接することで、あらゆる社会的現実に対して、心のゆとりをもち、それと距離を保ちつつ、立ち止まり、日常性を超越するような思索の時間がもてる。合唱団のソプラノ、アルト、テノール、そしてバスと重層的な響きのなか、それはまた自分の人間存在を透明にする瞬間でもある。公私にいそがしいなか、立ち止まり、ふり返ることができる心のゆとり、余裕がもてるようになった。

大村先生の永年のご指導は、バッハの曲をただ単に美しいだけではなく、日本語というわれわれの言葉によって、意味をもった音、バッハの「音楽の言葉」(Klangrede)を通じて、意志をもち、思想をもった音を追及、また団員と共有し、その成果を聴衆との「感動」の輪としても共有することにあると思う。合唱を通じた「感動」の共有体験により、人間存在の原点ともいうべき自己形成において、今までとはいっそう昂められた別の秩序の中に、もうひとつの新たな世界が静かに開けるのを感じるのである。

音に先生の人格が表現される。バッハ・大村先生・聴衆、その3者が、三位一体となって、時間の流れのなかで、ある時、ある場所で「感動」を共にする、その時間を共有する体験、そこにまた自分も参加することの素晴らしさ。「感動」とは地上の生に心が弾むことであると思う。明日にむかって生きる意欲が生まれる。その深遠なパワーが大村先生の東京バッハ合唱団にはある。

それは、単なる「非日常性」への逃避ではない。それは、新たな創造的な精神、新たな自己を確立し、社会に人間としてなすべきことへの「アインザッツ(Einsatz^{*})する精神」の共有にほかならない。バッハの歌を、連携可能な人々との関係を取り結ぶ契機として、さらに社会的課題の進むべき途を見出し、アインザッツする、そのありかたこそ、遙けく人々の心にうったえ、事態を改善するパワーをもつのであり、それこそが本来の音楽のあり方であろう。

※) Einsatz: ドイツ語の動詞 einsetzen 「(その場所に)置く、入れる、差し込む」; 「(兵・人員を)投入する、配置する」等の名詞形。とくに音楽用語として「(声・音の)開始(歌いだし、弾きだし); 「(その)きっかけ」等の意味でも用いられる。[編]

聖書の「心の貧しいものは幸いである」、「神は無きに等しき者を選び給う」は逆説として真理である。「神は、耐えられないような試練に会わせることはない」(コリント人への手紙)、底流には「苦難の神義論」がある。社会的現実から観念的に救い出されるのではなく、この社会的現実のまっ只中でそれと対峙し、意欲をもってさまざまな艱難を乗り越える。それが自分の救いとなるのである。まさに〈光に歩めよ さらば深き御霊の交わり 絶えずぞあらん〉である。

先生の『東京バッハ合唱団 三十年の歴史』(国際文化出版社1992年)を一読していたら、161頁にととも印象に残った文章があった。

「心の歌は、それら総てを蔽い、きよめ、広々とした晴朗の天地に私たちを導いてくれます。そんな合唱団の宇宙が、もう私たちの間には存在しているのです。心の歌を歌い続けて止まないならば、私たちの存在が深められていくばかりでなく、私たちの存在に触れて心の歌に勇気づけられ、人生

を開かれ、緩められ、高められてくる人たちの群が後を絶たず、このとんでもない時代の地上に、とんでもないユートピアが繰り広げられていくのです。私も続けますし、皆様も続けてください。そして移ろいやすい人の世に、バッハ合唱団が永遠の象徴としていつまでも働きかけられますように、ともに努力をささげたいものと思います。」美しい文章である。この文章の中に、大村先生の人となり凝縮されていると思う。

先生は、バッハを全人間的に理解し、自己を刻みとめ、昂め、艱難を乗り越えて、社会に対して「アインザッツする精神」で「光」にむかって永年歩んで来られたと思う。この半世紀にもわたる大村先生の指揮する「東京バッハ合唱団」に参加することを通じて、われわれは心が清められ、目覚め、地上の生に心がはずむ人間存在の極限に向かって努力、アインザッツすることの大切さを知ったのである。

50周年おめでとうございます。このような記念する年に居合わせられたことに感謝したいと思います。

創立 50 周年メッセージ

バッハ音楽との出会い、合唱団との出会い

岡村 隆 (バス団員)

東京バッハ合唱団創立 50 周年、誠におめでとうございます。以下、自分の音楽体験中心の話で恐縮ですが一文を寄せさせていただきます。

<50年という長さ>

東京バッハ合唱団が生まれた50年前、私は新宿区の西落合に住んでいてまだ中学2年生でした。私がちょうどクラシック音楽に目覚めた時期で、17センチ盤のクラシック音楽レコードを買い始めた頃でした。それから今日まで営々と続けてこられた50年という時間は、自分の人生の出来事と照らし合わせた時、それが気の遠くなるような長さであることを実感することができます。この奇跡的ともいえる偉業を成し遂げられ、今なお合唱団を率いられている主宰者の大村恵美子先生にはただただ敬服するばかりです。

<バッハの音楽との出会い>

私がバッハを聴くようになったのはその2、3年あとのことで、音楽之友社の月刊誌「レコード芸術」の定期購読を始めた高校生になってからでした。「レコード芸術」本誌はもちろん、別冊「ステレオのすべて」で紹介されるオーディオ装置やレコード評には大いに刺激を受けたものです。東京バッハ合唱団の初期に合唱団の指揮をされていたチェンバロ奏者の小林道夫氏を知ったのも、当時の「レコード芸術」誌でした。そん

な中でとくに興味を引いたのがカール・リヒターの《音楽の捧げもの》のレコード評でした。しかし、当時 2 千円もしたレコードは、欲しいからといって高校生の小遣いでおいそれと買えるものではありませんでした。1 枚のレコードを買うには高校生なら 4 日ほどアルバイトをしなければならなかった時代です。私もアルバイトをしてようやく手に入れた訳ですが、そうやって手に入れたレコードはまさに宝物でした。期待に胸を膨らませて聴いたリヒターの《音楽の捧げもの》は期待をはるかに超えるもので、聴き終えたとき、巨大で緻密な建築物の前にいるような感覚になりました。ベートーヴェンの生きる勇気を与えるような情熱的な音楽とは違う、何か純粹で透明な崇高さのある普遍的な音楽といった感じがして深く感動しました。以来、大のバッハファンとなりました。

＜バッハの声楽曲との出会い＞

オペラのアリアや歌曲などの声楽曲は、私が高校生の時に来日したベルリン・ドイツオペラの公演をテレビで観ていらい好きになり、ドイツリートなどはピアノを買い込んで楽譜を見ながら聴くことを楽しんでいました（ピアノの音を生で聴きたいだけの理由で買ったピアノでしたが、せっかく買ったのだからとバイエルを一通り習い、《2 声のインベンション 第 1 番》が弾けるようになるまで必死に練習したことが懐かしく思い出されます）。一方、宗教的な声楽曲は自分には理解不能と思い、まったく聴いたことがありませんでした。ところが 2009 年に、憧れていたバッハの故郷アイゼナッハを訪ねることができるドイツ旅行に行つてその考えは変わりました。バッハが晩年を過ごしたライプツィヒの聖トーマス教会に入った時、「やっとここに来れた」との感慨にひたりつつ、バッハはその声楽曲を聴かなければバッハを聴いたことにならないのではないかとの思いを強くしたからです。村田武雄著の『音楽芸術論』（音楽之友社、昭和 26 年初版、昭和 41 年購入）で「バッハを理解するためにはどの作品にぶつかれば、よいかといえば『遁走曲の技法』と『マタイ受難曲』にとどめをさす」と推奨されていたので、帰国すると真っ先にリヒターの《マタイ受難曲》を買って求めました。果たして、開曲の冒頭数小節を聴くなり「これは、すごい！」と圧倒されてしまい、大きな衝撃を受けました。もっと早く聴いておけばよかったと悔いることしきりでした。それから 1 年余り、通勤の行き帰りにほぼ毎日聴いていましたが飽きることはなく、他の曲を聴く気にもありませんでした。その後《ミサ曲口短調》《クリスマス・オラトリオ》《ヨハネ受難曲》やカンタータなどを聴き込んでいくにつれ、バッハの声楽曲の素晴らしさ、楽しさが一段と広がりました。それにしてもまさか還暦を過ぎて新しい音楽体験ができるとは思いませんでした、というのが正直なところでした。ドイツ旅行の大きな収穫でした。

＜合唱団との出会い＞

完全リタイアを数ヶ月後に控えた昨年（2011 年）秋、《マタイ受難曲》の演奏会でも行こうかとインターネットを検索していたら、東京バッハ合唱団がバッハを専門に演奏していることがわかりとても興味が湧きました。そこで 50 周年記念事業として企画されていた《ミサ曲口短調》の演奏会があることを知り、12 月の定期演奏会（第 106 回、杉並公会堂）で合唱団の素晴らしい演奏を聴くことができました。そして、大村先生の「日本語訳詩演奏の意義」（HP に掲載）に共感して、ただ聴いているだけでなく少しでも実際に体験してみたいと思いはじめていた私は、未経験であるにもかかわらずみなさんに励まされ、晴れて本年 1 月合唱団の末席に加えていただくことができました。練習に参加して感じることは、個々人の技術レベルがとても高く、カラオケしかやらない私には及びもつかないという思いです。でも練習では力強いピアノの伴奏や、美しいソプラノ、アルトの歌声を間近に聴くことができるので（よく聴き惚れてしまって困るのですが）、とても楽しく練習させていただいております。

＜ホームページ制作のお手伝い＞

私は趣味の車や写真、オーディオを中心とする個人ホームページをかれこれ 15 年運営しています。入団してまもなく、合唱団の 50 周年事業として公式ホームページを刷新したいという話を伺いました。そこで私も何かお役に立てればと微力ながらお手伝いをさせていただき、本年（2012 年）5 月 15 日に無事、公開の運びとなりました。公式ホームページのアドレスは <http://bachchor-tokyo.jp/> です。まだまだ充実させていかなければなりません、合唱団発展の一助になれば大変ありがたいと思います。

